

# 末黒野

すぐろの

2月号 (通巻786号)



# 法螺の音

小川玉泉

枝先は舟の上より松手入

鵲鴿の跳びては移る池の杭

木道の杖音秋の深まりぬ

まなかひに全容の富士菊日和

茅葺の宮家の旧居菊香る  
りんだうや山の日差の惜しみなく  
菊を観る身を委ねをり車椅子  
草紅葉櫂のぬくもる貸ボート  
天を指す檜林や尉鷄  
杉山へ法螺の音吸はれ冬隣  
茶の花や沢音とどくそば処  
門先を掃き終へ冬を迎へけり

# 海桐の実

松本三千夫

函嶺の日はあまねくも芒原  
秋の日を拒む関所の獄舎かな  
秋冷の富士黝々と湖展け  
秋惜しむ宮家の藁屋軒ふかく  
大小の寄進の鉄の下駄や冷え  
杉並木冷えて十八丁目茶屋  
その色に一句捧げん実紫  
島影の利休ねずみや海桐の実  
ほむらなす錦木にして且つ静か  
寄せ墓の元禄宝永実南天  
窟の齒朶枯れ兆しをり虚子の墓  
頭塔の歴史刻める磴寒し

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 枯蓮田

大橋伊佐子

十六夜の波しろがねを畳みけり  
彼岸花果てし棚田の静寂かな  
木の実降る音に仰げり天守閣  
湖はれて石山寺の秋遍路  
湖北なる桜紅葉の崎歩く  
桐一葉それから後の独り言  
草の実をつけて来し子や日の匂ひ  
月光の突き刺さりをり枯蓮田  
短日やどつと被さるビルの影  
対岸のビル遠ざくる時雨かな

## 秋の夜

小野口正江

秋冷や葉山の海の晴れはじめ  
密と出す亡夫の写真秋薔薇  
祝宴の余韻のさめず秋の夜  
水澄むや娘の婚と重ねぬて  
婚終へて一人安堵や残る虫  
母と夫は同じ忌日や雁渡し  
父の忌の石鑿の音文化の日  
花万年青咲きて曾孫の七五三  
おひねりを用意して待つ七五三  
婿連れて孫来てくれぬ返り花



# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）  
太字は推薦句

時 頼 忌 堺 昌 子

尉 鷗

鈴木一三

碧空をひき寄せ白き秋薔薇  
冬桜ふたつ三つ咲き時頼忌  
竹垣の苔むす藁屋昼の虫  
山間の合掌部落蕎麦の花  
秋蝶の高舞ふ里や富士見えて  
**時頼忌**わけても**石路の黄の深し**  
茶の花の早ほつほつと朝日影

**尉鷗**こそこの貌して来たりけり  
言ひたきを言へず仕舞や新酒酌む  
蓑虫や風に無心の命綱  
不動堂の護摩の煙りや暮の秋  
鯉飛んで曇り勝ちなる野島岬  
寿福寺の俳句ポストや夕笹子  
そこそこの年金ぐらし葦雑炊



秋の湖岸

西川みほ

紫苑

森清堯

菊人形姫より侍女の良く薫り  
通ひ祢宜待ちて始まる里祭  
鳴き止みて猫やり過す蝨  
湖に一筋の日矢秋の暮  
湖岸打つ波のリズムの爽気かな  
四阿の寂れ彩る散紅葉  
ちりめんの波に散り次ぐ木の葉雨

行く秋

松田泰子

耳澄ます

森清信子

打つ音を惜しむごとくに鉦叩  
衰へて知ること多し金木犀  
雲影のときに駆け抜け運動会  
やや寒のうどんにのりて花鯉  
鱒雲しばしば潮にうつりけり  
野仏のうしろざぶざぶ菜を洗ふ  
昨日今日気づかぬ地震や冬はじめ

母一人残し帰るや居待月  
秋灯や内なる声に耳澄まし  
雲の端に鴝色滲み秋の暮  
晴れ渡る谷川岳やけらつつき  
千変の岸のみみぢや舟下り  
春くや浮塵子にひるむ長屋門  
残照や田の白鳥の揃ひ立ち

# 青炎集

## 小川玉泉選



横浜 内藤庫江

横浜 中山良子

### 七曲り登る行く手の山紅葉

富士望む湖を斜めに鳥渡る

はるかなる山粧へりうろこ雲

ゆで上る蕎麦を待つ間や小鳥来る

花の名を記す句帳へ赤とんぼ

色変へぬ松や明治の残る庭

横浜 宮島ムツ

千葉 岡井マスミ

### 少しづつ流れてをりぬ鱗雲

小春日や家事あれこれと欲の出で

茶の花や山手を下る急な坂

茶の花の蕊のふくよか匂ふかに

蘆紅葉小さき庭先彩りぬ

橋脚を覆ひ隠すや葛紅葉

両手あて大樹の息吹き聴く小春

尼寺の山門小さし一葉散る

焼栗の香し昼の中華街

朝霧の湖の明け初め投網打ち

湖際の白垂のホテル葛紅葉

白樺の幹くつきりと紅葉山

湿原の百草百の紅葉かな

秋興や手形をもらふ関所跡

旅土産つるべ落としに持ち重り

鶏頭や子規を看取りの間に座せば

濡れ色の残る穂芒子規の庭

茶の花や病む人につく嘘少し

横浜 辻井ミナミ

杉木立色無き風と関所越ゆ  
行く秋の空千年の杉並木  
秋空の青の透きたる雲一朵  
菊作る苦勞話や菊花展  
墓塚に背中を預けにぎり飯  
山門の扁額暮れぬ石路の花

横浜 外山生子

蒼宵に稜線まろし秋日和  
菖蒲田は名札ばかりや残る秋  
江戸偲ぶ通行手形秋思濃し  
いたはらるる言葉のぬくし菊香る  
角火鉢据る館や冬隣  
堰落つる水の勢ひや溪紅葉

横浜 加藤八重子

草紅葉荒地を這ひて彩りぬ  
意地通す歳にもあらず衣被  
癒さるる一日の疲れとろろ汁  
捨て切れぬ句にかかはらぬ残る虫  
訪はるるも訪ふも句の縁冬ぬくし  
忙しさも幸せのうち冬仕度

横浜 田村加代

禅林の洩れ日の淡し式部の実  
烏瓜藪の葉騒ぐ柚の道  
夫の愚痴聞くも看取りや冬に入る  
住み古りて庭の彩増す石路の花  
ガレージや落葉の彩の吹き溜り  
皺のなき似顔絵描かれシクラメン

横浜 中野久雄

日を拒む杉の参道秋気満つ  
湖の群青深み秋ぞ行く  
身に入むや往事伝ふる関所跡  
秋惜しみをれば耀ふ山の湖  
峠路に富士見て里の菊花展  
山麓の風柔らかや竹の春

横浜 饗庭恵子

野紺菊こまかき影のそよぎをり  
掛稲や木瘤と紛ふ雀どち  
新蕎麦を箸割つて待つ漢かな  
藁塚や黄昏さそふ鳶の笛  
満天星の丸く刈られて紅葉せり  
木の葉散るちりては空を深めけり

# 耕 土 集

## 松本三千夫選



大梁の削り武骨や菊の宿

新宿 浅岡 麻實

山の湯の灯冥し竈馬跳ねもせず

はらはらと紅葉や人の背に肩にかさと踏みこそと歩みて枯葉道

分銅のごとく垂れをり蜂屋柿

初冬や満月白き西の峰

職人の気魂の菊花大作り

子鴨二羽親を離れて競ひあふ

姫昔蓬耄けて秋の風

池の端の冬の桜や淡き色

夕日背に急ぐ家路や鱗雲

横浜 北郷 和顔

面映ゆし席ゆずらるる敬老日

発車ベル響くホームの夜寒かな  
終電の遠のく尾灯夜寒し

尾瀬ヶ原池塘に映ゆる秋の色

夜寒さの墨絵のごとし渡月橋

秋深し熊の糞ある山毛櫨の道

山里の残照届く吊し柿

朝明けの寝覚めの水や楳の宿

顔に映ゆ紅葉並木のプラタナス

留守の間に咲きし梔子実をつけて

三谷 糸い

障子張る経師屋親と瓜二つ

懐に匂ひ袋を白秋忌  
一声に秋冷告げぬ明烏

石路咲きて水鳥の声もるる池

冬座敷何もかからぬ朱の衣桁

立冬後まだ葉の青き大公孫樹

生まれ日の熱爛酌めば夢すこし

小春日や九十五歳もて余し

寄せ鍋のほつほつ煮えて恙なし

芝田 幸恵

横浜 長尾 良子

町田 伴 秋草